

私の授業

青柳幸一

筑波フォーラム編集委員
ビジネス科学研究科法曹専攻教授
(あおやぎ こういち／憲法学)

近時、授業内容の「質」や授業方法の巧拙が問われている。授業の「質」を高めるといふ要求自体は、当然のことであると思われる。本号に寄せられた「私の授業」からも、授業方法に関する試行錯誤やそれぞれの筆者の工夫が窺える。

法曹実務家養成を目標とする法科大学院における授業方法の基本型は、従来のような、教員が一方的に講義するというスタイルではなく、受講生と質疑応答しながら授業を進める双方向授業、いわゆるソクラテス・メソッドである。

周知のように、ソクラテスにとって根本をなすのは智である。ソクラテスのいう智は、単なる学識ではなく、実践に結びついたものである。智は求めて初めて得られ、学修し、錬磨することによって完全に近づく。人を完全な智に近づける方法が、ソクラテスにとって対話方式であった。プラトンの『ソクラテスの弁明』やクセノフォーンの『ソクラテスの思い出』等で知ることのできるように、ソクラテスの対話方式は、

人間がいかに無知であるかを自覚させ、物事を漠然と、かつ雑然と考える人間に明晰な思考を得させるためのものである。過誤を正し、思考の混乱を解きほぐす。

ソクラテス・メソッドを用いる教員が留意すべきことは、対話という方法自体が授業の「質」を担保するわけではないということである。ただ単に学生の応答の揚げ足を取るだけの対話であるならば、学生に明晰な思考を得させることに結びつき難い。ソクラテス・メソッドで成果を上げるためには、教える側の能力が問われる。なぜなら、そのためには、教える側が広く、深く、そして緻密に考える人でなければならないからである。したがって、ここで、良質な研究と良質な教育が結びつく。換言すれば、良質な教育の必要条件は、良質な研究である。素晴らしい研究者が常に授業が巧みであるわけではないにしても。